

子ども参画のまちづくりを考えるワークショップの実践 —宇都宮市大谷地区での活動—

事業代表者：宇都宮大学教育学部 教授 陣内雄次
構成員：宇都宮大学教育学部 4年 上野由里加

1. 事業の目的・意義

生活の基盤である地域において、若年世代の存在の重要性は高まっています。特に子どもは、「次世代の担い手」であり、幼いうちから地域と積極的にかかわることが期待されています。

しかし、学校と家庭を行き来することが日常生活のほとんどを占める子どもにとって「地域」は形として捉えにくいものであり、「まちづくり」ということにおいても実感はないものと推察されます。

そこで本事業は、宇都宮市大谷地区をフィールドに、子ども参画のまちづくりワークショップを行い、子ども参画のまちづくりワークショップの可能性について検討することを目的としました。

2. 事業内容

(1) 文献調査

まず、文献や先行研究の整理により、子ども参画まちづくりワークショップの意義について考察するとともに、本事業で行うワークショップの内容についての参考としました。

(2) 子ども参画まちづくりワークショップの実践

宇都宮市大谷町において、小学6年生を対象に、地域と暮らしをテーマにした子ども参画まちづくりワークショップを計5回行いました。(当初中学生の参加を目指していたのですが、なかなか参加者がなく、結局小学生の参加のみとなりました。)

本活動によって、子どもたちが、身近な地域に関心を持つようになり、地域社会と積極的にかかわる姿勢を育むことを目的としています。また、ここでの「子ども参画まちづくりワークショップ」とは、実際に体を動かして、地域を点検したり、アイデアを出し合ったりと集団で活動する学習を指しました。

表1 活動内容一覧

回	日時	テーマ	内容
第1回	2013/7/15(月・祝) 9:30~15:30	「探検！大谷の宝探し」	○子どもたちによる大谷地区まち歩き ○子どもたちによる大谷地区のガリバーマップ作成
第2回	2013/7/28(日) 9:30~15:30	「大谷の魅力を取材しよう！」	子どもたちによる大谷に暮らす方への聞き取り調査

第3回	2013/8/24(土) 9:30~15:30	「見つけた！分かった！大谷の魅力」	子どもたちによる「大谷マップ」の作成
第4回	2013/9/1(日) 9:30~15:30	「大谷ツアープランを考えよう！」	子どもたちが大谷に暮らす方を案内する「大谷ツアー」の計画を立てる
第5回	2013/9/22(日) 9:30~15:30	「体験！大谷ツアー！」	大谷に暮らす方に「大谷マップ」を渡し、「大谷ツアー」を実施する

(3) アンケート調査

実践した子ども参画まちづくりワークショップの評価を行うために、参加した子どもたちや、活動を参観した大人に対して2013年9月22日にアンケート調査を行いました。

また、2013年11月5日に大谷地区で実施された宇都宮市主催のシンポジウムにて、実際に活動には参加していない学生や大人を対象に、アンケートを実施し、同様に活動評価や今後の可能性について検討を行い、今後の活動の参考としました。

3. 事業の成果

(1) 家庭科教育で「地域とのかかわり」に関する学習を行う意義

事業代表者と構成員が、教育学部家政教育専攻の住居学研究室に所属することから、家庭科教育との関係から分析を行いました。家庭科の学習では、できるだけ児童・生徒の体験・実践に訴えて学習させ、家庭生活を中心とする人間の生活の資質向上をはかることが目標に掲げられています。また、家庭科は、社会科や総合的な学習の時間とは異なり、個人・家族の生命とくらしの視点から生活を捉える教科です。ゆえに家庭科の学習では、子ども自身が生活を見つめ、問題を認識し、生活の中から解決や改善の方法を見つける視点が欠かせません。

しかし、学習指導要領において、「地域とのかかわり」に関する学習単元は、住まいを中心に扱う住生活領域ではなく、「家庭生活と家族」等の別の領域の中に設置されています。さらに、住生活領域は、教員の苦手意識や子どもの興味関心の低さといった課題を抱えています。

このようなことから、現在の指導要領で設定されている領域を超えて、「地域とのかかわり」を住まうということと共に考えさせる学習環境が必要であり、今回実践した子ども参画まちづくりワークショップの試みは、今後の住教育にとって非常に参考になるものと考えます。

(2) 参加体験型学習の実践による成果

各活動（表 1）や子どもたちの様子、アンケート等から、地域と積極的にかかわろうとする態度や、身近な地域を生活の一部として捉える力を獲得することができたと考えられます。



写真1 活動中の子どもたちの様子（2013年9月1日・22日 筆者撮影）

また、子どもたちはやはり学校での実践を期待していることが分かりました。（図1）

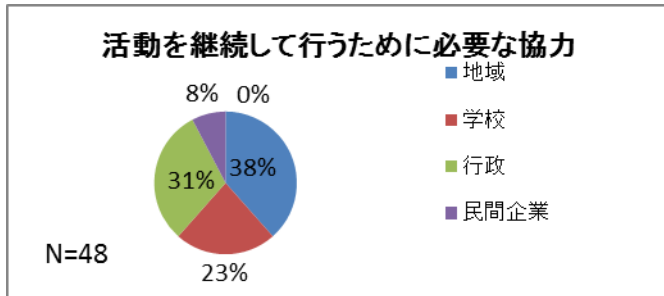


図1 参加した子どもたちによる活動評価

さらに、シンポジウム参加者へのアンケート調査により、学校現場でこのような参加体験型学習を行うためには、地域と学校・行政等と連携を図ることが必要だということも分かりました。（図2）

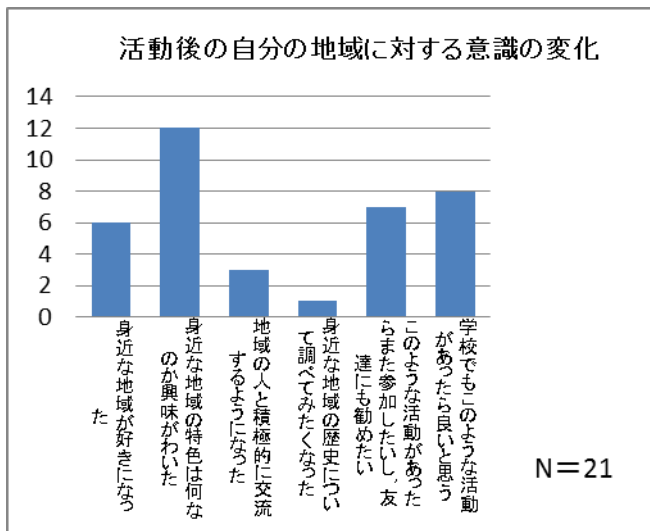


図2 シンポジウム参加者による活動評価

4. 今後の展望

本事業では、小学生の子どもたちに協力してもらい、宇都宮市大谷地区にて子ども参画まちづくりワークショップを5回にわたって実践することができました。また、中高生には小学生のお世話担当として参加してもらいました。また、大谷地区のツアーガイドの方、地元住民の方など多くの方々のサポートもいただきました。まずもって、紙面を借りて御礼申し上げます。

子ども参画まちづくりワークショップ、アンケート調査などによって、ワークショップを通して子どもたちの地域への関心や積極的に関わろうとする意欲が高まることになりました。ここに、子ども参画ワークショップの意義が凝縮されていると言えます。

活動フィールドは大谷地区とは異なるかもしれませんが、引き続き子ども参画まちづくりワークショップを実践していきたいと考えています。また、小学生ばかりでなく、中高生も主役として参画したいという意欲が湧くワークショッププログラムの立案と実践を目指したいと考えています。